

## 琉球放送



島尻 一

(RBCビジョン制作技術部制作課 課長・プロデューサー)

みん  
な  
の  
こ  
ろ  
う  
民  
放  
史

題  
字  
中  
川  
順

消された歴史 貴重な文明  
太平洋戦争末期の1945年。



主役の金城大和さん

琉球放送では、年に一度全社をあげての企画募集が行われます。これまで取り組んだことのないチャレンジ精神にあふれた企画を一本番組化する、通称「チャレンジ企画」。

2016年度に選ばれたのは、私の企画『琉球歴史ドラマ尚巴志 (しょうはし)』。

14世紀から、明治政府によって沖縄が日本の琉球藩にされる19世紀まで、琉球は独立した一つの国「琉球王国」でした。その王国を誕生させた武將、尚巴志の歩みをドラマにするというのが、私の狙いでした。

「ありつたけの地獄を集めた」と米軍兵が口にした沖縄は、那覇、浦添、宜野湾、嘉手納、読谷：あらゆる場所が焼け野原となります。とくに首里城のある那覇市首里は日本軍の司令部もあつたことから激戦地となり、何もかも焼失してしまいました。人びとの命はもちろん、各地のグスク：琉球国以来、城はグスクと呼ばれています。、歴史的な文献や文化財も消滅、「琉球王国から続く沖縄の歴史は、戦争で一度分断された」とも言われています。

歴史を振り返る手立てを失った沖縄の人々は、故郷の歴史に触れる機会も少なくなつたといえるのです。戦争だけが理由とは言いませんが、沖縄の大きな損失だと考えます。

現在、県内の学校ですら、琉球国以来の沖縄の歴史を学ぶ時間は非常に少なく、県民は尚巴志の名前を知ってはいても、何を成した人物なのか？琉球王国がどのような経緯を経て樹立されたのか？実は分かっている人が少ないのです。

かくいう私自身もそうでした

が、これは若年層に限らず、40代や50代まで多くの世代に共通する課題です。

沖縄には、『沖縄芝居(うちなー芝居)』と呼ばれる舞台劇があり、沖縄の言葉・うちなーぐちで時代劇を演じていますが、若い人びとや子供のなかには、うちなーぐちを理解できる人も減っています。

やはり歴史に触れるチャンスが減っているのです。

琉球放送が2013年に放送を開始して今も続いている『琉球サウダーヂ』という番組があります。



沖縄の自然を生かし撮影

私がディレクターを務めている

て、約130年前まで王国だった琉球、そして沖縄の歴史と文化を、県出身女優 国仲涼子さんのナレーションで伝えています。

おかげさまで番組は、視聴率および視聴者の反応も良く、番組制作を続けるなかで、県民が琉球の歴史について知れたがっていることを実感し、今回のドラマ企画を思いつくに至ったのです。

### 沖縄の人の違和感に配慮

企画が選ばれ実際にドラマ制作が始まりましたが、困難の連続でした。

1990年代の前半まで、琉球放送は舞台や歴史ドラマを多く制作していました。

しかし、この20年あまりで制作経験のある先輩方が退職し、特に歴史ドラマのノウハウは途切れているのが現状です。

また、毎年旧暦のお盆の時期に「オキナワノコワイハナシ」というドラマを放送しています。

新暦より旧暦を重視する沖縄の風習にちなんだホラードラマを、県内外の制作会社が作るのですが、こちらは現代劇。

時代劇・歴史モノの経験はほぼ無しという状況だったのです。『琉球歴史ドラマ尚巴志』の舞台は、14世紀から15世紀にわたる琉球。

中国・明時代の華人も登場します。県民が視聴するのですから、可能な限り時代考証に沿った衣装を使わなければなりません。

陰口ではありませんが、過去に本土で制作された琉球を舞台とした歴史ドラマ。そして、映画の舞台となる沖縄の表現に、県民が少し違和感を感じているのも事実です。



県内ではおそらく初となるような大掛かりな合戦の撮影

「間違っただけではないけど、コ

レが琉球かな」「沖縄の人間がこんなこと言うかな」「衣装や言葉や行動」、今回は私たち沖縄県民が作る歴史ドラマなので、県民が違和感を感じるポイントに気をつけて、衣装や脚本・小道具作りに苦心しました。

衣装がない セットがない  
カツラがない

兵士役のエキストラは…

衣裳に関して、毎年、琉球王国時代の再現イベントを行う首里城公園に衣装の借用をお願いしますが、時代が異なる清の時代(17〜20世紀)の衣装しかなくNG。唯一、明時代の実物を模した衣装を所有している自治体に借用のお願いをしますが、業務外であることを理由に断られてしまいました。

オリジナル衣装を製作する予算もなく、最終的に全国放送の歴史ドラマで衣装を製作した県内の染物店にお願いし、なんとか借り出すことが出来ました。

次は屋敷や城などのセット。先輩方から、かつては社内スタジオに屋敷のセットを組んだと聞きました。その頃は、スタ



ジオで雨も降らせたそうです!。今やそのノウハウも残っていません。

県内を駆け回り、時代にふさわしいかやぶきの屋敷や城に見える場所をロケ地としました。

最後はカツラです。県内で行われている沖縄の歴史舞台や古典芸能などでカツラを使用しているものの、テレビでは生え際があまりに目立つので監督がNG。かといってテレビ用のカツラなど沖縄には存在しません。



琉球独特のカタカシラという髪型の再現に苦労

出演者の方々を個別にお呼びして半カツラを開発。前髪の地毛をいかしつつ、後頭部に半カツラをつけるという方式に決まりました。そのカツラも安いパ

ーティーグッズを流用するといふ涙ぐましい努力です。最近、男性の髪型が刈り上げ・短髪の方が多く、前髪もカツラの必要がある出演者に関しては、時代考証的に問題のない帽子やハチマキをすることにしました。

ドラマの撮影後に、BSで放送されていた古い韓流歴史ドラマを見ると、出演者がほとんどハチマキをしていることに気づきました。

「海のむこうでも苦労してたんだな」と韓国スタッフと酒を酌み交わしたくなりました。

撮影で最も苦労したのは、合戦シーンです。兵士役のエキストラを80人揃えなければなりません。予算の関係で全員がボランティアです。

映画や全国放送の撮影では80人は規模が小さい方でしようが、衣装・小道具・受け入れ態勢を考えると県内では異例の規模。

制作体制のノウハウもありません。映画の助監督経験のあるスタッフさんにお手伝いを願ひながら、2日間、早朝から夜遅くまで城跡で撮影を行いました。

監督が最も力を入れたシーンでもあり、力作といえるでしょう。エキストラの皆さんには感謝してもしきれません。

天気にも恵まれ、なんとか2週間のロケで全3話の撮影を終えることが出来ました。



### 放送時間に強力な裏番組

いくつもの困難を乗り越え、なんとか完成した琉球歴史ドラマですが、放送時間もチャレンジでした。番組は全3話。

3週連続 水曜よる9時から1時間の絶好の時間帯。

しかし初回放送の裏では、WBC日本代表の試合がありました。バイスターズの筒香選手がホームランを打った直後に私

ちのドラマが始まりました。テレビが2台ある居酒屋で両方のオンエアチェックをしていた私は、筒香選手がホームインするのを苦々しく見た覚えがあります。

つづく2話目の裏では、テレビ朝日のドラマ『相棒』の最終回2時間スペシャルの後半1時間が重なり、強敵と向き合うハメになってしまいました。

結果、視聴率は初回がなんと14%、3話平均も11%という結果でした。合格!とは言いませんが、及第点ではなかったかと思えます。



琉球の歴史に中国(明や清)のキャラクターが必須

### 嬉しい視聴者の反応

放送終了後、ドラマに関する

評判は上々でした。琉球の歴史については辛口な視聴者も多く、情報番組やバラエティで歴史をとりあげると、「そうではない」「私が知る歴史だ」と：だが、それはどこからの引用なのかなど、問合せが非常に多いのです。しかし今回は、想像していたより問合せが少なく、好印象であることも感じました。



琉球ではノロ(右・女性の司祭)が大切な存在

そして意外な反応は、インターネット上で見かけられました。嬉しいことに、ドラマ放送中に、ツイッターで県内の学生をはじめ、30、40代から好意的な反応がリアルタイムで見られたことです。

更に、沖縄出身のドラマの主

役が、本土の特撮ヒーロー物に出演し、現在、人気アニメの声優も務めていることもあったのでしょうか、本土のファンから「ドラマを見たい」という声が多くあがったのです。

実際、ツイッター上でアンケートを取ってみました。回答の半数以上が沖縄県外からという結果でした。その声に応えることができないか検討中です。

事前に3分程度の予告編を制作していたおかげで、CM枠は即完売し、営業担当から嬉しい悲鳴も聞こえてきました。

ドラマの内容に影響ないギリギリの尺でCMを増枠もし、全3話即座に完売。さらに、放送後に営業担当、冠スポンサーに御挨拶に伺うと「こんな企画を持ってきてくれてありがとう」と逆に御礼をされてしまったと嬉しい報せもありました。

### 郷土の歴史ドラマ制作の課題

視聴率も及第点、評判も上々。悪くない結果ですが、正直に言くと、今回のドラマ制作費は当初見込みより予算を大幅にオーバーしてしまいました。それで

も美術、衣装費、人件費など各所にだいぶ我慢をしてもらったのです。

また、撮影地が意外と少ないことも制作の足かせになり、セットの費用が見込めないこともあります。

制作費増の直談判をし快諾いただけましたが、今後歴史ドラマを撮るとなった場合、「地元



国王を任命される主役

おかげさまでCM枠は完売しましたので、放送に加え、DV

Dの制作販売、もしくはインターネット配信などで収益を考えたといけないと思います。

また、ツイッターでの反応も良かった事を考えますと、クラウドファンディングで制作費を募るという方法もあるかもしれません。



### しまくとうば(島言葉)

今回、あえて取り組まなかったことがあります。取り組めなかった、と言うのが正しいのですが、「言葉」です。

沖縄には、《しまくとうば》：沖縄独自の言葉。ウチナーグチとも言われます：があります。県民向けのドラマですから、



《しまくとうば》で演じるのが理想です。

しかし、今回は標準語で演技をしてもらいました。理由は二つ。県内外を問わず、子どもから大人までドラマを理解しやすいようにするため。そして、もう一つは、俳優陣が《しまくとうば》を話せないためです。

現在、沖縄芝居や古典芸能に関わっている関係者ですら、若手になると《しまくとうば》を話すことが出来ないという言葉の問題に直面しています。



14世紀の市場の再現にチャレンジ

《しまくとうば》は地域によっても異なります。那覇と石垣、宮古島など本島と離島でも違いますし、本島内でも北部と南部では大違いです。

また、14世紀の言葉の厳密な再現も難しく、言語指導の費用や時間も捻出できないことから標準語を選択しました。《しまくとうば》で歴史ドラマを作るという大きな宿題が残りました。



### 最後に「ローカル局の使命 今後の展開について」

この企画の目標は、「意外と自らの郷土の歴史を知らない沖縄県民に、足元の歴史に触れてもらう」でもありました。

主人公の生まれ故郷でもある南城市では、撮影にご協力いただいたこともあり、撮影地マップを作成して市民に配布。また、

市ホームページにも公開されていました。実は、南城市民のなかでも、主役の尚巴志について知らない人が多いのです。



海を望む空撮

ドラマをご覧になった県内のとある書店さんでは、放送中の3週間、番組の写真を使ったポップをつくり琉球歴史書籍コーナーが出来ていました。

今回、実現はしませんでした。が、ドラマでとりあげた城や史跡を扱った書籍化、ドラマを市町村で上映したり、ドラマを県内の小中学校に授業で視聴していただくなど、放送後の展開も検討すべきでしょう。

地元の英雄を主役にした歴史

ドラマ制作というプロジェクト。企画から1年で放送という駆け足のプロジェクト。今回のドラマ制作を通して「地元の歴史を知りたい」という県民の思いを肌で感じるとともにプレッシャーも感じています。

「尚円(しょうえん)王」「護佐丸(ごさまる)」など名前が知られていても、県民にどのような人物か十分伝わっていない琉球史の人物は、まだまだいます。

青臭いことを言えば、彼らを後世に伝えるのは地元ローカル局の使命とも考えています。継続性を考えれば先に挙げた費用の問題が避けて通れません。

国内外への番組、出版や史料ツアーなど2次イベント、制作費を圧縮するための演出・制作法、ローカル局がドラマ制作を行う事ができるよう、キー局とは違う方法を模索していかなければならないと考えています。

### 【資料提供】琉球放送

RBCビジョン